【追悼特集】

村山研一先生を偲ぶ―その功労と功績を讃えて

信州大学に於いて長きに渡り教育・研究、中でも地域社会の発展にご尽力されてきた、村山研一先生が急逝されました。

その功労と功績を讃えて本号では、先生と縁のあった方々にお言葉をいただき先生のこれまでの偉業に対し、心から敬意と感謝を表し、ご冥福をお祈りしたいと存じます。

以下に簡単な先生の学歴・職歴を紹介させていただきます。

昭和 53 年	東京大学大学院　社会学研究科　卒業
昭和 53 ～ 55 年	信州大学人文学部　講師
昭和 55 ～平成 4 年	信州大学人文学部　助教授
平成 4 年～ 25 年	信州大学人文学部　教授
（平成 20 年～ 21 年	信州大学　理事）
平成 25 年	信州大学　名誉教授

村山研一先生を偲ぶ―その功労と功績を讃えて

信州大学人文学部長　吉田正明

信州大学人文学部で35年の長きに亘り教育研究に努められ、学部長や副学長として大学・学部運営にも尽力してこられた村山研一教授が、平成25年５月26日に急逝された。突然の訃報に接し、まさに青天の霹靂であった。村山先生は、地域ブランド研究会の立ち上げにおいても中心的な役割を果たされ、本会の運営と発展にも多大なる貢献をしてこられた。その功労と功績の大きさに、改めて瞠目させられる思いである。

村山先生は地域社会学を専門にされ、特に長野県を中心とする地域社会における地場産業の存立構造、経済・社会の変動に伴う地域産業の動態、産業再編の様態、その社会的問題や課題を中心に調査研究を行ってこられた。また、地域の内生的な発展を促進するものとして期待されている「地域ブランド」にいち早く着目して、人文学的手法による先駆的な研究に取り組まれ、その様態を明らかにする一方、産学官の連携を積極的に図り、信州に

おける地域ブランドの発展にも大きく寄与してこられた。

産業や地域ブランドは、従来、経営学や経済学の分野で主に取り扱われてきたが、村山先生はそれに社会学の理論と手法からアプローチすることで、地場産業の研究においては、産業集積の動向、あるいは産業構造や地域内の分業体制の変動だけを見るのではなく、それらと地域社会の歴史的・文化的背景との関係、あるいは人々の生活状態や意識との関わりも視野に入れつつ、それらの問題や課題に迫ろうとしてこられた。まさに村山先生のご研究は、地域ブランド研究会の要となる中心的なテーマのもとで展開されてきたと言えよう。

村山先生はまた、平成18年度から20年度の日本学術振興会科学研究費補助金（基盤A）「地域ブランドの手法による地域社会の活性化」の大型外部資金を研究代表として獲得され、日本地域政策学会第６回全国研究大会を誘致して開催されるなど、あらゆる面で地域ブランド研究会の発展のために貢献されてきた。

このように村山先生は、ご自身の研究テーマを深められるとともに、産学官の連携を積極的に図り、長野県における地域ブランドの発掘と発展に尽力され、平成21年10月には、信州大学産学官連携推進本部・地域ブランド分野長に就任され、地域貢献に資する教育研究のみならず、地域社会学者としての研究に裏打ちされた大学と地域とを結ぶコーディネーターとしての役割も精力的に果たされてきた。その成果としては、全国中小企業団体中央会の農商工連携等人材育成事業の採択を受けて実現した「信州直売所学校」の開設や、平成24年10月に、科学技術振興機構社会技術研究開発センター（RISTEX）の、科学技術イノベーション政策のための科学研究開発プログラム、「イノベーション政策に資する公共財としての水資源保全とエネルギー利用に関する研究」という大型プロジェクト経費を、研究代表として獲得され、本学における文理融合型の研究に新たな地平と可能性を切り拓かれたことなどが挙げられよう。

学生教育の面では、社会学を熱心に講じるのはもちろんのこと、社会調査法関連科目、とりわけ社会調査実習にも精力的に取り組まれ、同実習の多くは、自治体と問題意識を共有し、自治体と連携しながら実施されたものであり、受講生が社会調査法（フィールドワーク、質問紙調査）の全プロセスを経験的に習得できるように指導することはもちろん、調査の分析結果をまとめた調査報告書を調査協力者や自治体に配布するなど、常に地域社会とのつながりを念頭に置いて、地域社会に教育研究成果の還元を積極的に図ってこられたのである。

大学の管理運営に関しては、村山先生は人文学部長（平成11年度～同12年度）として本学部の運営全般に当たられると共に、法人化を見据えて学部改革に精力的に取り組まれた。平成11年度には教育面での外部評価を行い、これと平行して学部内に「教育と研究の高度化に関するワーキング・グループ」と「組織の見直しに関するワーキング・グループ」を設置し、答申を待って、改革の方向付けを明確にされた。また、平成12年４月に、本学部における地域連携と地域貢献に資する研究の特化を図るため、現「地域連携オフィス」の前身となる「内陸文化交流室」の設置に尽力された。以来、「地域連携オフィス」と改称された同組織において長年幹事を努められ、様々な自治体との受託・共同研究等を通じて、村山先生が地域貢献に果たしてこられた役割は計り知れないものがある。

平成13年４月に就任された信州大学副学長

（企画担当）としては、学術情報、学術国際交流、地域との連携、広報等を担当され、これらの業務に関して大きな成果を挙げられた。さらに、学長を補佐して、大学理念やグランド・デザインの策定等を中心になって進められた。また法人化の準備作業においては、⑴目標・計画の策定、⑵法人化後の人事制度の設計、⑶安全衛生管理体制の確立、この３項目に関して責任者として手腕を振るわれた。また平成19年10月に、再び信州大学副学長（点検・評価担当）に就任され、信州大学の点検・評価の責任者を努められ、平成19年度の暫定評価及び平成20年度の業務実績評価において中心的な役割を果たされた。

さらに、平成20年８月に信州大学理事（人事・点検・評価担当）に就任された際には、信州大学法人の点検・評価の責任者に加えて、人事部門の責任者としての職責を全うされたのである。

上述したように、村山先生は地域ブランド研究会の設立から運営と発展において、その重責を中心になって担ってこられたが、この間の先生の地域ブランドを巡る研究成果の一端は、本誌『地域ブランド研究』に発表され、そこにおいて示唆に富む提言や問題提起がなされている。また先生は、人文学部が連携協定を結んでいる安曇野市や青木村をはじめ、飯山市、須坂市、千曲市、栄村などの自治体と協働した数多くの調査研究を実施してこられ、栄村の震災復興計画や、安曇野市の景観条例などの策定においては、先生の研究成果や提言が生かされている。

また、平成25年度大学改革推進等補助金の「地（知）の拠点整備事業」に、本学の「信州を未来につなぐ、人材育成と課題解決拠点『信州アカデミア』」が採択されたが、これも実は、申請時において村山先生のお力添えがあったればこそ、採択されたCOC事業に他ならない。さらに信州大学は、平成24年度と25年度の日経グローカル誌において、総合評価で２年連続地域貢献度No. 1の大学に選出された。これも、これまで信州大学産学官連携推進本部・地域ブランド分野長として、村山先生が果たしてこられた産学官連携のコーディネーターとしての数々のお仕事の成果の賜であるとも言えよう。

以上、村山研一教授の功労と功績について概略を述べさせてもらったが、もちろんこれは、限られた字数ではとうてい言い尽くせない村山先生の残された多大なる功績の一端に触れただけにすぎない。

故村山教授の功労と功績に対して、政府からは正四位の位階と瑞宝章が授けられ、学長からはその特段の功績に対して名誉教授の称号が授与されたことを最後に付言しておきたい。

ここに謹んで村山先生のご冥福をお祈りいたします。